

▼ 勝峯『評釈』に、「一茶は『わが菊(注、妻の名)や何食せても二人前』で、よく食ふなアと感心してゐる。その癖、一茶も若い女房をさげすめない健啖であつた。その餅を腹が張つてたゞゐては苦しい程の貪り方をしたのである。『餅腹をこなしに歩く夜寒哉』で散歩もいゝが、痔を持病とする年寄には外出は剣呑である。手をつかへば自然にからだも動く。接木が腹ごなしに持つて来いの運動と慰藉になる。『齒ももたぬ口に啞へてつぎ穂哉』はその接木にも不自由な自嘲であるが、『たのみなきおれがさしてもつく木哉』の挿木より効能のある運動である」。川島『新解』に、「その好きな餅をたらふく食つて、さすがにもたれ気味なので、腹ごなしかたがた庭に出て接木をするというので、思うことなげな、満ち足りた生活のにじみ出ている句である」。

注

- (1) 詳しくは、拙稿『『おらが春』第一話の設定をめぐって』、『門松立てず煤はかず』考(小著『おらが春詳考』所収)を参照されたい。
- (2) 詳しくは、拙稿『『おらが春』の起稿時期』(同右)を参照されたい。

散つてかゞやかしい。花ちるやは不用意に詠んだのでない。花への関心は開帳仏の方に奪はれるが故に、散るやが効果的なのである。伊藤『小林一茶集』に、「人の寄る場所に秘仏を開帳して、拝観料を取る事が当時は流行した。一茶はさうしたものに人一倍興味を持つて居た」。川島『新解』に、「折しも弥生半ば過ぎて、盛り過ぎた花が群集の上にひらひらと散りかかっている。ふと見ると、参道のちょっとした木立のかけでも、どこやらの秘仏を開帳して人を集めている。小開帳の語感から言っても、これは下総成田の不動とか、江戸の何々というような名刹のそれではなく、言わば観音の開帳に使乘して、さい銭あつめのために持出してきた開帳である。『小陰も小開帳』の裏に、保科観音の開帳そのものの賑々しさが暗示されている」。

通りぬけせよと垣から柳かな (一茶)

㊦ 『おらが春』初出。

▽ 『七番日記』文化15・11、「柳から柳哉」。

解 通りぬけせよといわんばかりに、垣の向こうの柳の枝が手招きしている、の意。柳の枝のしないぶりを、擬人法を使って俳諧化した。

▼ 勝峯『評釈』に、「出窓の格子先へ、隣の台所が顔を出したりする横丁などで、廂合ひの小路を見つけて、こゝは行寒りの袋路次か知らんと、ちよつと佇んで、ためらはれる時に、坪庭の四つ

目垣の外へ枝を垂れる柳が、青い眉を柔かく靡かせて、その通り抜けを知らせるやうな情景は江戸から東京へ持ち越して、以前は下町辺でちよく／＼出逢つたものである。一茶はかうして江戸人的な勘と風俗を支持するかのやうな態度を、この句などで示唆してゐる」。川島『新解』に、「しなしなと微風にしなう青柳、思わせぶりの女性的な姿態―路次の曲り角の垣内か、寺の裏木戸のようなどころでもあろうか。「いずれにしても、ここは通り抜けられそうだなと、さしのぞく気持と、それを肯定するかのごとき柳の撓しないと、の以心伝心的な風情を、得意の擬人的命令法で軽く俳諧化している。『通りぬけ無用で通りぬけが知れ』の川柳味と比べると、これはたしかに象徴詩たる俳句の領域に属している」。

中島『小林一茶』に、「通りぬけせよと言わぬばかりに、垣から柳の枝ののぞいているさま」。

餅腹をこなしがてらのつき穂哉 (一茶)

㊦ 『七番日記』文化15・11。

注 「餅腹」、餅を大食いして、ふくれた腹。「つき穂」、接木をするとき、台木にさす若枝、ここでは、接木、の意。

解 日ごろ精を出して働くことをしない男。それが今日は人が変わったように接木(果樹であろう)に熱中している。その様子に、「餅腹をこなしがてらの」というのである。徹底した自身の客体化による俳諧。

松島概念をはなれては何ら景観の躍動がない。これはおそらく、日本三景の一の松島に配するに極めて野趣ある雲雀をもってしたことが、ねらいであったのだろう。

大猫の尻尾しっぽでなぶる小蝶哉 (一茶)

㊤ 『八番日記』文政2・1。

▽ 『七番日記』文化15・9、中七「尻尾でじやらす」。

解 横になった大猫、時折りゆっくりとその尻尾を動かす。そのあたりを小さな蝶が舞っている。それを、大猫が「尻尾でなぶる」ととらえたのは、一茶独特の観察。

▼ 勝峯『評釈』に、「虚寝入りの臉を折りく／＼ひらくと、銀の針のやうな瞳孔が横睨みに鋭く光つて、踊りかゝる姿勢を取つて、悠悠その長い尻尾を振つて見れば誘惑する猫である。敵に廻つて蹴られる風かぜをよそほひながら、蝶は蝶ですこしの隙もあたはず、動く尾へ近寄つては離れつゝ、かへつて猫をからかふやうな舞ひ振りである。猫に大、蝶に小の冠頭詞を殊更に加へたのでなく、図体の自然に大きい猫であるとき、蝶の小さい存在が対照的に美しい」。川島『新解』に、「大猫はいかにも図々しい感じを与えるものである。どさりと寝ころんで、小蝶が側近く来ても一向にさわがず、時折太い尻尾をものうげに動かして追払うようにしている。それがちょうど小蝶をじらしているように見えるのである。小蝶は近よることもできず、さりとて逃げもせず、猫をめぐって

ひらひらと飛びまわっている。うすら眠い春昼の景情である。但し「大猫」・「小蝶」の対照は意識して置かれてあるものようである」。

三月十七日ほしな詣まう

花ちるやとある木陰も小開帳 (一茶)

㊤ 『おらが春』初出。

▽ 『七番日記』文化15・3、座五「開帳仏」。

注 「三月十七日ほしな詣」、保科村(現、長野市保科) 阿弥陀山清水寺(保科観音)に参詣。『七番日記』文化12・3に、「十七晴 反古会 保科清水寺詣」。三月十七日はその開帳日。

解 三月十七日、保科観音の縁日。信濃の遅い桜も散りぎわである。観音様の参道のちよつとした木陰でも、人出を目当てに小開帳をしている。『八番日記』(文政3・2)に、「さく花をあてに持出す仏かな」。

▼ 勝峯『評釈』に、搖曳する花の雲、京都の音羽山に擬へる保科の阿弥陀山清水寺は、豊を高く雲に聳えさせて、秘仏観世音の開帳に吸はれる人出で賑ふ。群集をあて込みの出開帳が、参詣道のちよつとした木立の陰にも見える。素朴な信仰心は縁起の口上に誘はれて、何文かを寄進しては御利生を祈るのであった。厨子の扉へ、そして覗いて拝む顔々へ、葩がひらく／＼天から降るやうに

見える堂々たる外觀を「云ふ」と記した。そして、前掲の解はこれをふまえたものである。川島『新解』はさらにこれをふまえて『葦芸伝』を引き、それにそった解を記した。

伊藤『小林一茶集』、宮本『大観』は、「独座」の主体を一茶自身ととり、「独座している一茶に対して」と解した。「術学癖ある一茶のことゆえ」と川島は記しているが、いかがであろうか。ひとり座す作者の前にあらわれた蛙、ひきがえるであろう。それと作者が向い会っていると解したい。「にらみくらする」、そう感じたのは作者特有の観察による。

梅の花爰こゝを盗めとさす月か (一茶)

㊦ 『八番日記』文政2・1(信毎版全集本は、座五「さす月よ」。

梅塵本『八番日記』、「さす月か」。前掲『一茶八番日記』に従う。

解 夜行の足を止め、花盛りの梅の小枝に手をのばす。ある一枝だけが特に美しく月の光をあびている。月はここを盗めというのだろうか、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「暗香浮動して夜行の足をはつと佇立させる。

梅花の魅惑はその強い香氣にあるが、これは月下の枝振りに誘惑される句である。折つて戻つて花瓶に挿すによい枝配りである。折らうとすれば造作なく手の届いて、妨げる何ものもない高さも逃へ向な枝である。月が、枝一杯の花に光を浴びせてゐるから、枝振りも高さも目測されるのである。よし来たと折つてその罪を

月の誘拐にかこつけるのでない。梅盗人の連累に月を引入れようとするのでない。月を擬人視して、その照らすところの梅花を、より美化する技巧の『盗め』である」。川島『新解』に、「梅の花のここを盗めとてさす月か、の意。折つてさす手ごろなよい枝ぶり、手のとどきそうな高さ、そこを照準としたように月のさしこんでいる風情である」。

松嶋の小隅ハ暮くれて鳴く雲雀 (一茶)

㊦ 『おらが春』初出。

▽ 『七番日記』文化15・11、上五・中七「松島やかすみは暮て」。

注 「小隅」、片隅、の意。

解 松島の隅々はうす暗くなり、海面だけが白く日にうつる。こんな時間に、おお、雲雀の声が、の意。仮構の句。

▼ 勝峯『評釈』に、「日本三景の名所、奥州松島の春望である。

暮惜むかのやうな沈む日の残映で、明暗に展開する島々の視野に遠いものは、蒼茫として薄暗い帳りを垂れつゝある。晚景を眺望するその人の上には、日すがらの鳴き草臥ものかほで、猶、明るい空でぐんぐん高度をとつて囀つてゐる雲雀がある。雲雀のかなる惜春譜は暮れゆくものへの哀別を覚えず、忘我の境にあつて、明朗な気分で佇ち尽して疲れを知らないのである」。川島『新解』に、「この句は松島という名にすがっているばかりである。

解 高々と干してあるさらし布は、風に吹かれて霞の中へ流れ込んでいる、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「多摩の連嶺は圧されて潰されたやうに低く這つている」「河原の晒し布は清冽な水に洗はれて、雪の肌のように白く、旗のやうに長く、いく筋か風にはためき靡いてる。高さは遠見では横山の方に遜色がある。刷毛でさばいたやうな霞は横山を薄い糊の中にぼかしてゐるが、山のあるところは青くはみ出て、霞はそこまで引き足りない。晒し布の高さは霞の不足を補ふやうに聳えて眺められる」。川島『新解』に、「多摩の丘陵地帯をこめて霞みわたっている中に、河原のさらし布が幾筋となく春風になびいているさまである。そのさらし布が霞の中に流れているやうな風情を『霞の足し』とは賢くも言い得ている。座五『聳えけり』とあるので、低い丘陵地帯を抱きこんでいる野の平板な眺めが暗示されて、焦点となっているさらし布の高さが印象的である」。

独座

おれとしてにらみくらする蛙かはづ 一茶

㊦ 『八番日記』文政2・2（信毎版全集本は、中七を「かゞみくらする」と翻刻するが、大久保逸堂・栗生純夫校訂『一茶八番日記』資文堂に従う）。梅塵本『八番日記』、中七「白眼にらみくらする」。

注 「おれとして」、おれとともに、の意。

解 おや、この蛙はおれとにらめっこをするぞ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「両手を揃へて突き、胸を張りかげんに、首をあげてゐる蛙の姿は、悠然として迫らない独座の身構へである。その趣に叶つたゐらずまいである。くるりと大きいその眼を動かさず、ちつと空に据ゑてゐるありさまは、見詰めるものゝない癖にと思へば、自分と睨みくらしているのである。一茶の奇警な観察に手を拍たねばならない」。伊藤『小林一茶集』に、「独座している一茶に対して、庭先に罷り出た蛙がにらみっこして居るのである」。川島『新解』に、「術学癖げんのある一茶のことゆえ、前書は成語によつたと見るべきであろう。随書韋芸伝に「芸容貌魁偉、夷狄参謁スル毎ニ必ず儀衛ヲ整へ盛服シテ以テコレヲ見ル、独座一榻たたくニ満ツ」とある。本氣ににらめっこしたら、こちらが負けそうな、凶ぶとげな蛙の姿態をあらわすためにこの前書は利いている。句意は、おれとにらめくらをしている蛙であることよ、の意」。宮本『大観』に、「庭先に出て来た一匹の蛙が両手を揃えてつき、首をあげてその目を動かさず、じつとこちらを見据えている。蛙は俺とにらめっこをしているんだなと、蛙と向かい合っている瞬間をこの作者特有の奇警な観察でよみ出した句」。

考 前書の「独座」について、勝峯は『評釈』の語注で、「漢籍に『独座一榻ニ満ツ』の成語がある。榻は横幅の広い牀（こしかけ）である。一人だけその上に坐つてゐて、大きくこしかけを塞いで

のなのである。しかし、この面にくいまでの野性の発揮、伝統的風雅観への反逆は、俳諧史上における一茶の地位の確立、すなわち文学美の限界をおし広げたことの功績に、重要な裏づけとなっているのである。

考 この句、川島は「前句よりも傍観的であるが、錢と言っているところに一層の卑俗味があり、涅槃像に対する一層の冒瀆がある」と評したが、「小うるさい」の句のスケールの大きい「をかしみ」に比して卑俗性が表に出すぎおもしろみをそこなっているように思われる。

一茶には、「ねはん像錢見ておはす顔もあり」(文化12)、「寝ておはしても仏ぞよ花がふる」(文政2)、「御仏や生るゝまねに錢が降る」(文政8)などという句もあり、これらは思い切った尊厳への冒瀆による「をかしみ」をねらったものだったが、「作りもの」としてのおもしろさはともかく、卑俗に墮するものとして批判は残るだろう。

猫の子や秤はかりにかゝりツ、じやれる (一茶)

㊤ 『八番日記』文政2・1。

▽ 『七番日記』文化15・9、座五「つゝざれる」。

解 秤にかけられた猫の子は、秤を持つ手にじゃれついて、秤の目を読みとることもできない。

▼ 黒沢『研究』に、「一茶の句は全体として、あつさりと詠はれ

て居りますが、この句などは殊にさう云ふ風があると思ひます。而も実情をうまく写生し得てゐます、まだ毛も柔らかい目も見えるか見えぬ位の可愛い、猫の子を、此奴どの位目方があるだらうかと秤にかけてる、処がその子猫は自分の体重をはかる秤とも知らず無関心に秤の竿や綱に、じゃれついているといふのであります。勝峯『評釈』に、「閑人ひまじんの一茶は秤の皿に入れて重みをはからうとするが、迎もちつとしてはゐない。ぢやれる仔猫より、額に八を寄せて叱りつすかしつ、秤と首つ引の一茶の苦心を察するとき、漫画的なほゝ笑みをたゝへさせる句である」。川島『新解』に、「まりのようにはずみのついでの子猫を、はかりにかけるのは容易なことではない。うまく、はかりの皿に乗ってくれたかと思うと、おもりにちょっかいを出してころげ落ちる。皿のひもにからみつく、うっかりしていると、はかりざおをつるしている腕を引掻かれたり食いつかれたりする。そうした情景をきわめて平明に叙してある」。

玉川

さらし布霞の足しに簷そひ(え)へけり (一茶)

㊤ 『七番日記』文化15・11。『八番日記』文政2・1。

注 「玉川」、武蔵国調布の玉川。『万葉集』に、「多麻川にさらす手作りさらさら何ぞこの児のここだ愛かなしき」(巻14・東歌)。

嘘なら起して見るがいゝ、あゝ、うるさいと大喝されるかも知れないぞ。寝釈迦をかう解釈する一茶は、だん袋に同じく二月十五日の題で、『せうばんに我らもごりり涅槃かな』と、釈迦と紙一枚の擬態を行つてゐるのである。伊藤『小林一茶集』に、「釈迦の涅槃図に対する一茶一流の奇抜な着想」。川島『新解』に、「諸人信仰の対象を我々式の世界に引きおろして、我々凡俗の感情を移入したのである」「しかし、これも必ずしも一茶の独壇上とまでは言い切れぬ。当時の草双紙類を見ると、この種の構想も珍しくはないのであって、尊厳への冒瀆も、退屈した江戸人の求めた卑俗な笑いの一種であつたとも言ひ得よう。ただ、伝統的な風雅意識の殻を破つて、そうしたものを勇敢に俳諧の世界に持込んでいるところに、一茶の独自性が云々されるべきである」。中島『小林一茶集』に、「二月十五日は釈迦入滅の日で、寺では釈迦涅槃図を飾って法会を行なう。ちょうど桜の花の咲くころである。やれやれ花が咲くと世の俗人たちが浮かれ騒ぐので、こうるさいことだと言わぬばかりに、お釈迦様は寝てござる、というユーモアなのである。卑俗なおかしみが板について、危なげがない」。

ミ仏や寝ておはしても花と銭だま (一茶)

㊦ 『おらが春』初出。

▽ 『八番日記』文政2・4、「二月十五日」と前書きして、中七「寝てござつても」。

注 「二月十五日」の前書きはこの句までかかる。

解 「寝ておはすミ仏」は涅槃像(図)である。礼拝の対象たる涅槃像を、庶民の日常生活の中に引きずり落として、対等の立場から口をきく。朝早くから夜のふけるまで働きとおして、それでも花(名誉や地位)も銭(財)もないというのが庶民世界である。

▼ 勝峯『評釈』に、「勿体ないがうらやましい御身の上だ。横着なごろ寝ではないが、あの通り寝てをられるには疑ひもない。われらは碌にうたゝ寝もならず、稼いで、はたらいて貧乏に追ひつかれて、七日の花を一日見るか見ないである。それなのに寝ながら娑婆に咲く花を飽きるほど眺められる。その上、お涅槃を拝みに犇めいて、あの御賽銭の降るはく」「寝ながら両手に花と銭は、凡夫の浅猿しさにお釈迦さんがおうらやましようござるわい。

——一茶が凡愚の境に迷つて、宗教的な諦めと悟りを掴めなかつたのは、この句に見える皮肉で深刻な観察に、常に理智的に煩ひされたからである。川島『新解』に、「寝ていながら賽銭が降り、あたりの花も気色立ってよい眺めをほしのままにしている、まことにけっこうな御身分でござる。というほどの意で、前句よりも傍観的であるが、銭と言っているところに一層の卑俗味があり、涅槃像に対する一層の冒瀆がある」「伝統的風雅観の中に閉じてもっている人たちは、これが俳句かと呼ばれるものであるうかと抗議されるであろう。それだけに穿ちを生命とする川柳と紙一枚の隔たりのものがあり、一茶の作風は無批判に真似てはならぬも

(福原落)。謡曲には用例多く、『山姥』に、「一樹の陰、一河の流
れ、皆これ他生の縁ぞかし」をはじめ、『江口』『経政』『巴』『松
虫』『鉢木』などにも。また、『椿説弓張月』にも、「共に一樹の
陰に宿るも他生の縁として捨るに忍びず」(残、六〇回)とある。
この句の初出が文政二年の二月十五日付の書簡であるが、豪雪
の柏原では桜の開花に間がある。はじめに「一樹の陰」という語
のあったことは否定しがたい。

二月十五日

小うるさい花が咲迎寝釈迦かな (一茶)

㊦ 文政2・2・15付李園宛書簡。『八番日記』文政2・3。

▽ 『発句鈔追加』、上五「眼の毒の」。

注 「二月十五日」、釈迦入滅の日。「寝釈迦」、俗に釈迦の涅槃像
(図)をいう。

解 二月十五日は「涅槃会」の日、すなわち釈迦入滅の日である。

「寝釈迦」は、その涅槃の姿を写す臥像(図)。それを隠居の楽寝
のさまにすりかえた。涅槃会の日、満開の花の下をくぐって参詣
する善男善女に向かって、「小うるさいことだ」と顔をしかめる。
今年もまた、その季節になったと、釈迦の臥像がつぶやいている、
というのである。鎌倉大仏を「美男におはす」と言った昴子の比
ではない。

川島つゆ『一茶の種々相』(春秋社、昭3)に、「人世に対して
兎角発し切れないところのあつた一茶も、彼の住む唯一の世界で
ある芸術—芸術といふ上品振つた言葉さへ彼にふさはしくない気
がする。寧ろ作句の世界と云つた方が適當であらう—に於いては、
随分腕白で皮肉で、時によると反抗家でもあつた。それが何時か、
世人の所謂一茶の特色を成したもので、この句などは其特色を最
もよく發揮して居る。この句は然し、さういふ見地に立つて見る
ばかりではなく、単に作品として離して見ても相當に価値がある。
それは、この句を見てから涅槃像に対する時には同感されるであ
らうが、あの、ゴロリと横になつたお釈迦様の寝姿は、涅槃とい
ふ神秘的な感じよりも、どうかすると一寸した小休みといふ感じ
の方が強くするものである。『小うるさい』は、作者の感情を直
ちに対象に移入したまで、ある。作者の主観と鋭い観察眼とが、
其処にカチリと火花を散らして居る。旧套な概念に囚れて居ない
ところが、この句の生命であらう。勝峯『評釈』に、「梵語で生
滅を否定する涅槃の理趣を、かう、あつさり解釈されては經典学
者は迷惑であらうが、一茶の法悦は釈迦の人間味にあるのだから、
学者も苦笑するだけで叱りもなるまい。あゝして彩色された絵の
中で寝てござる釈迦は、薪の林のけむりとなつたのではない。あ
れは人間が花に酔つてわめき、唄ひ、踊るのが見苦しい爛漫の春
となつたので、暫く小うるさい娑婆を逃げる空寝入りである。し
んから睡つてなぞ居はしない。況んや死になんかされる筈がない。

▼ 勝峯『評釈』に、「庭もない。眺める木もない。隔ての垣もない。窓外は茫茫たる田である。稲を刈り、水を落してから、景となり、風情を添へるものはなくなつた。その田のひと、ころを選んで水を引き、幣をたて、浸した粉をまいて、苗代に充て、から、周囲は甍つたやうな春の生気を見せてきた。浅い水を凌いで、苗代の芽は日のめぐみを慕つて伸び、もりあがる力で、青一色に代田を塗る。そよ／＼と青い波を靡かせる風も芳しい。屑屋のやうな住居は、これで額縁のやうに裝飾されて、さながら我が庵りを引立て、その風趣をますばかりに拵へたやうな苗代の青みである」。川島『新解』に、「水盤の稗時(ひえまき)の中に飾られた箱庭の家を見るような可憐な情趣である。しかし『庵のかざり』という主我的な発想は、やはり一茶である」。

花の陰あかの他人へなかりけり (一茶)

㊦ 文政2・2・15付李園宛書簡。『八番日記』文政2・3。

解 ともに花(桜)の下に集まり、ともにそれを賞する者に、自他の境界はなくまさに同行・同朋の思いがする、の意。勝峯『評釈』に言うように、「一樹の陰、一河の流れの仏教的な因縁を信ずればこそ」である。

▼ 勝峯『評釈』に、「これまで見ず知らず、袖もふれ合はせねば、挨拶もしたこともない全くの他人である。万朶の花咲くさくらには、その木陰に立寄る人を悉く、なごやかにうちとけさせる魅力と、

ふしぎな媒介性を持つてゐる。その花を眺めつゝその陰に憩へば、あかの他人の俚語は無理由に解消してしまふ。かうした一茶の主観的な解釈には、下心に一樹の陰、一河の流れの仏教的な因縁を信ずればこそと思はれる」。川島『新解』に、「同じ花のかけに、同じ花を賞でようとして集まってくる人々に対して、思わず、横に広がっていく親近感である。一茶のために稀々おとずれる和やかな心境であり、救いの一時であるといえようか。我執の強い一面、代々の門徒で、殊に死の床にも朝々の看経をおこたらなかつたやうな父親の血を受けて、説教聴聞を好んだ一茶は、『所有畜類是世々ノ親族ナリ』と後記(注、第十三話)している如く、小動物や植物に対しても深い愛情を持っていた。しかし『あかの他人はなかりけり』は、一茶個人の感情というよりもむしろ民族化した宗教観というべきであつて、この場合は、この言葉に、より多く興味を引かれていたと考えられる」。中島『小林一茶集』に、「花見に集まった人々が、おのずから心なごみ、たがいに笑みを交わすさま」。

考 「一樹の陰、一河の流れ」、ともに一樹の陰に宿り、一河の流れを汲むのも、すべて前世からの因縁による、の意。

『海道記』に、「一樹の陰、宿縁浅からず(西帰)。『海道記』の影響が指摘されている。『寛政三年紀行』に、「誠に一樹の陰も宿縁あればこそ(あやしき一夜)。『平家物語』に、「一樹の陰に宿るも、先世の契あさからず。同じ流をむすぶも多生の縁猶ふかし」

画賛でも乞はれた時の孕句はらみくとなつた「の」である。あんなの俗語に、指さしながら見惚れる一茶の横顔が見える」。川島『新解』に、「本末もわからず繁茂しているむぐらの中から、あれあのよ
うな蝶が生まれ出た、というのであるが、見どころもないむぐら
に対して、『あんな』が対蹠的な美しさを暗示している」。

上野遠望

白壁の誹そしれながらかすみけり (一茶)

㊤ 『おらが春』初出。

▽ 『八番日記』文政2・2、「上野」と前書きして、中七「そしら
もつゝも」。文政2・2・15付李園宛書簡にも。ただし、後者の
前書は「上野遠望」。『八番日記』文政2・3、「上野」と前書し
て、「白壁のひいきしてゐるかすみ哉」。

注 「上野」、江戸の上野。「白壁」、富の象徴たる土蔵の白壁をさす。
解 白壁の土蔵は、大衆のそしりをよそに、霞の向うにゆったりと
連なっている、の意。上野の山から市中を見はるかした景である。

▼ 勝峯『評釈』に、「分限者はいづれ猜まれてよくない噂も立て
られやうし、実際あくどい儲け方、慳益な行ひで家蔵を建ててもし
たであらう。憎しみをその白壁に濺いで、悪垂れ口を叩く傍で、
黙つて立聴きをしつゝ眺めてゐる。自然はこの憎しみ、そしられ
る対象を、いつか霞を揺曳させて、悪口を封ずるやうに美化して

了ふのである。後に『そしられつゝも』と再考してゐるので、
『誹れながら』にはこの『も』の反語が内在することを推知され
るのである」。川島『新解』に、「白壁は富のシンボルと見られ、
富は何時の世にも羨望・誹謗の対象となり易い。この句は必ずし
も一茶の創意ではなく、蕪村門几董の句にも『商人のよき壁いや
しけさの雪 几董』の類想があり」「それよりも蕉門越人の作
『のがれたる人の許へ行くとて／みかへれば白壁いやし夕かすみ
越人』この句は一茶が俳諧師の教養として目を通していたに違
いない俳諧七部集中の『曠野』に出ている。越人は枯淡な蕉門俳
人中最も一茶に近い体臭を感じさせる人で、この外にも『うめの
花もの気に入らぬけしき哉 越人』『門の梅不精く』に咲きにけ
り 一茶』など、越人から影響を受けたと思われる句が幾つかあ
る」「遠望のレンズを白壁に当てて、かすみこめた江戸市中賑い
の状を彷彿せしめている」。中島『小林一茶集』に、「『白壁』は
富貴の家の象徴。貧乏人から羨まれ、そしられるのである。上野
の山から江戸市中を見はるかした景」。

苗代ハ菴いばのかざりニ青ミけり (一茶)

㊤ 『おらが春』初出。

▽ 『七番日記』文化15・11、上五「苗代も」。
解 何のかざりもないかくれ家だが、ようやく苗代が青々としてき
た、の意。

(つぼ) といつてすゑどころに定まりはあるが、健康人は多く膝の下の凹み三里(さんり)へ卸したのである。『俚言集覽』に、『世話尽』二日灸八月にも云馴つれど二有ハ初を用。「木食楚仙独吟紹巴評」手足のあさにやいとをぞする(といふ句に)土用もや今日の二日に明ぬらん。二日やいとの心に候や。『毛吹草』に、『初の彼岸同二日灸』(三)。「桜川」に、「君がため又身のためや二日灸」(春一)。

解 二日灸をすませたあと、かたわらでじつとのぞき込んでいた猫に、お前にもひとつ、とその鼻先に線香をつきつける、の意。猫がおどろいて、のけぞるさま、その瞬間にこの句の俳諧性はある。

▼ 黒沢『研究』に、「二月二日は総ての諸病を癒すといふ灸をすえる日である、淋しい自分を慰めて呉れる小猫にも効験ある灸をすえると云ふのであります。す、へ、るは、す、え、る、です。草庵に住むものは一茶と小猫のみ―こうした生活を考へたとき、成程と首肯できる句であります。勝峯『評釈』に、「かくれ家や猫にも一つお年玉」は田作(ごまめ)でもやつたのであらう。この句は嘘だ。読者をからかひ過ぎるともいへないが、猫に灸はどうだらう。猫は熱いものは食べない。火の気、殊に艾のぢりく灼ける嗅ぎ、それをすゑるとなれば暴れて手におえないであらう」「かくれ家には人に逢ひたくない。人を避ける気分を含んでゐる。そこで猫への愛は強くなる。万病を除く二日灸を猫の達者を願つて、すゑてやりたい気分には同感される。これを一茶のわるさ、いたづら

には解したくない」。伊藤『小林一茶集』に、「隠逸の所在なきに」。川島『新解』に、「正直に猫に灸をすえると解釈すれば大騒動である。恐らく生きてゐる猫に灸をすえることは不可能であらう。これは二日灸をすませたあとの軽々した気分で、それお前にも一つと、猫の鼻先きに煙の出る線香をつきつけて、逃げまわるのをおもしろがるというような、つれづれな、しかしなごやかな家庭風景である。中島『小林一茶集』に、「世捨人が、退屈まぎれに猫にまで二日灸をすえている」。

律からあんな胡蝶の生れけり (一茶)

㊦ 『おらが春』の初出。

▽ 文政2・2・15付李園宛書簡、『八番日記』文政2・2、中七「あんな小蝶が」。『八番日記』文政2・3、上五・中七「塵塚にあんな小蝶が」「芥からあんな小蝶が」。

注 「律」、路傍、藪など広い範囲に生い茂って草むらをつくる蔓草。勝峯『評釈』に、「雑草の繁る藪を引つくるめて律と呼ぶ地方もある」。『続虚栗』に、「山賊のおとがい閉るむぐらかな」(芭蕉)。解 掃き溜めのようなところであらう。そこに這いまわっている律の中から、「あんな」上品な蝶が生まれ出たよ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「一茶がこゝで『あんな』と驚異するのは、そこで生まれた蝶としてあまりにも麗しすぎる感嘆を言外に寓してゐる。いぶせき律の上に舞ふ蝶への同情は、一茶に取つて後に

らんで邪魔だからやるのだが、あの足取のゆるやかさ。暢気な姿である。折角のさくらまで辿るあいだに、提げて持つ瓢箪が空にならねばいゝ。川島『新解』、「この句の『見えて』という想定に伴うのんびりした気分は、やはり老人らしい。桜の名所、それも派手に騒ぎたてる場所ではなく、北武蔵の蒲桜のような、たった一本の名木へつづく道―青麦と菜の花との交錯しているような野道を急ぐでもなく急がぬでもなく、少し前かがみにトコトコと歩いていく一人者、それを見送っている農夫の鍬の柄にあごをのせながら立っている姿なども彷彿とする。主観に立脚しながら『見えて』と軽く投げた調子が距離感となって、うすがすむ野面の情景を展開させている。やや花曇りの、歩けば薄く汗ばむほどの気温を感じさせる」。中島『小林一茶集』に、「花見に行くと見えて、尻からげで浮き浮きと歩いてゆくよ」。

初はつ午うま

花の世を無官の狐鳴ななきにけり (一茶)

㊤ 『おらが春』初出。

▽ 『八番日記』文政2・3、上五「初午に」。

注 「初午」、陰暦二月最初の午の日に行われる稲荷社の祭礼。「無

官の狐」、正一位稲荷大明神の眷属以外の狐。野狐。

解 花(桜)の時節。その花に浮かれて稲荷の眷属ならぬ野狐まで

が声をあげている、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「初午の太鼓が長閑に響いて、梢の苔も口にく膨らんで行く。花の咲く世界となるのも近い。人に憑いたり化かしたり無籍者の野狐も、初午の太鼓に踊らされて鳴く。八番日記の、『花の世に官ほしげなる狐哉』が此の句の注釈になる」。伊藤『小林一茶集』に、「正一位稲荷大明神ならぬ平凡な狐まで花に浮かれて鳴き出す」。川島『新解』に、「稲荷の神体又は召使の狐(俗信)ではなく、ただの狐がわびしげに鳴いている。自然の花もけしき立ち、一方は笛太鼓や赤飯で祝われる得意の時節であるのに。というほどの意。時めく官僚狐に対して野狐のみじめさを対象させたところが一茶らしい」。川島『一茶集』に、「その稲荷のけん属(俗信)すなわち官僚狐ならぬ野狐が鳴いている」。

かくれ家や猫(系)もすへる。二日灸 (一茶)

㊤ 『八番日記』文政2・2、上五・中七「かく(れ)家や梅(猫)にもすへる」。梅塵本『八番日記』文政2、上五「隠れ家や」。文政2・2・12付李園宛書簡、『八番日記』文政2・3、上五・中七「かくれ家や猫にもすへる」。

▽ 『八番日記』文政2・12、座五「御年玉」。『自筆本句集』『文政版発句集』、中七「猫にもいはふ」。

注 「二日灸」、陰暦二月二日、あるいは八月二日にする灸。無病延命の験があるという。勝峯『評釈』に、「艾に火を点じて灸穴

解 春まだ浅く、善光寺の御堂前では、灰猫の尻尾の先のような楊も供華として売られている、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「堂前とあるから参詣人の手に渡らない前の花売のものである。一茶には『朝霜やしかも子どもの御花売』の写生句があつて、花売説を傍証的に確かなものにする。柳の下に、『で、さへ』の三字を挿入すると句意が明瞭になる。世の中には屑やすたりものがない寓意もこめられてゐる」。伊藤『小林一茶集』に、「灰色の猫柳までがお花として仏前に供へられている」。中島『小林一茶集』に、「善光寺堂前では、灰色をした猫柳までが、お花の仲間入りをして、売られている」。

さくら〜と唄はれし老木哉 (一茶)

㊤ 文政2・2・15付李園宛書簡、「桜〜と諷れし」。『八番日記』文政2・3。

注 「さくら〜と唄はれし」、長歌「娘道成寺」に「さくら〜とうたはれて」。

解 盛んなるころは、「さくら〜」と騒がれたこの桜も、すっかり老木になって、の意。「娘道成寺」の文句をふまえた。

▼ 勝峯『評釈』に、「盛者必衰のこれがよい標本である。かうして枯れ残る二夕枝、三枝には余生の脈が通つて僅かに花をつけてゐるものゝ、人もすさめず、咲き凋れて、衰れにも儚ない春に逢ふものだ。これがあの咲いた、咲いた、桜が咲いた。と、人を慰

め、浮かれ、囃させたその一本とは信ぜられないではないか。唄はれしの下に『果がこの』を補ってみると、『老木哉』に無量の感慨が託されてゐることを知る。娘道成寺の『さくら〜と唄はれて』の文句なども、一茶の記憶裡に閃いてゐたかもしれない。川島『新解』に、「これも騒がれた桜だったが」と、樹齡尽きて漸衰しいく老樹に対する感懐があるが、実は歌曲から得た上十二音が作者の興味の的だったのである。『浅ましの老木桜や翌の日に倒るゝまでも花のさく哉 文化十年』など、盛者必衰の姿をあらわそうとしてさまざま試みてゐるうちに、この『さくら〜』を記憶の中によびさましたのであろう」。

桜へと見へてじん〜端折哉 (一茶)

㊤ 『七番日記』文化15・9。『八番日記』文政2・1にも。

注 「ぢん〜端折」、「爺端折」の音使形。着物の背縫いの裾をつまみあげ、帯の下にはさみ込むことをいう。

解 花見にでも行くとみえて、「ぢん〜端折」姿の男が歩いていくよ、の意。

▼ 勝峯『評釈』に、「長閑にうらくと、照るでもない、曇るでもない、暖かなよい日和である。野に、山に、ほつり〜と浮彫に動く人、人、人。春着の裾をきちんと端折つて、ゆつくり歩いて行く後ろ姿は、この田舎に用事あつて来た人でない。花見だ。あの人たちには遠出の花だ。じん〜端折は急ぎ足には、裾がか

ありそうもないことの譬えに、『すっぽんが時を作る』という諺がある。それを使ってこの夢幻感を生かしたものだと思う。宮本三郎『俳句大観』（明治書院、昭46）に「空にはおぼろの春の月がかかり、沼の水面はとろっと静まり返って動かない。この思わず夢幻の境にさそい込まれるような夜、今にもすっぽんが鶏のように時をつくり出しそうないを感ずるといのである」。

山の月花盗人をてらし給ふ（一茶）

㊦ 『八番日記』文政2・1。中七「花ぬす人を」。

解 たわなに花をつけた、その一枝を折り取ろうとする、その手もとを月はやさしく照し給う、の意。「花盗人」、その自他の識別はむずかしいが、自と見ればその客体化。

▼ 勝峯『評釈』に、「よし、一ト枝、折れ。花盗人は風雅の神も咎めまい。いや、盗むのはむしろ花を愛する極地だ。愚問愚答をかさねながら、枝近くさし延べた手に掴んだのは月光だ。気がついて見れば満身にその光を浴びてゐるのである。人間的な羞恥、突出した手は引込ませようし、折った花なら遣り場がなからう。眺める人としてない山の月の森厳さが、『照らしたまふ』の敬語でいみじくも表現されてゐる」。川島『新解』に、『しばらくは花の上なる月夜かな』（芭蕉）―咲き満ちた花の上にかかっている団々たる月が、しばらく運行を止めているかのごとき、天地一如の飽和状態を示している芭蕉の句を、地下ちげに引きおろした観がある。

しかも、花盗人を配しつつ、なお、景観の大いさの害われていないのは、『てらし給ふ』という敬語による森厳味にあると思う。

言葉の幻術というべきである。山の月と言ひ、花盗人というので、当然山の傾斜面が眼前するので、芸は細かくなっているが、その点、芭蕉の句にまさりさえする。荻原『名句』に、「この句『山の月花盗人を照らしたまふ』というのだから、お月さんはこの『花盗人』を是認して、『さあぞんぶんに折るがいい、手許を明るくしてやるぞ』といって照らしたまうという気持である」。

善光寺堂前

灰猫のやうな柳もお花かな（一茶）

㊧ 『おらが春』初出。

▽ 『八番日記』文政2・2、「善光寺堂前」と前書して、「白猫のやふな柳（う）もお花哉」。

注 「善光寺」、信濃の善光寺。「灰猫」、灰毛の猫のことも言うが、ここでは残灰のぬくもりを求めて囲炉裏やかまどの中に入って、灰だらけになった猫、その毛色。「柳」、いわゆるねこやなぎ。「お花」、堂内前卓に供えてある親鸞の故事を受けた親鸞松に対し、参詣人が供えるお花。ここではお堂前で売られている供華。『二十四輩巡拝図会』に、親鸞松と参詣人に供華を売る者の絵。これは『評釈』にも引いてある。

ある。同時に、油を流したやうな水辺にあつて、まんまるい春月
 に対した作者の胸の拡がるやうな気分も説明なしに感じて貰へる
 筈である」。黒沢『研究』に、「春の月が大きく水郷を照らしてゐ
 る、あゝ草間に住むすつぽんも躍り出して来るだらう、鶏は朝日
 に向つてときをつくる春の月夜にはすつぽんでもときをつくるで
 あらうかといふ意味と考へます。すつぽんと春のおぼろ月くよ
 く調してゐます。而も何とも云へぬユーモアを感じる所もありま
 す。やつぱり一茶です」。勝峯『名句評釈』に、「すつぽんといふ
 水中の生物に『時を作る』といふのだから随分荒唐無稽な話であ
 る。しかもこの句を読んでゐれば何となく首肯される情趣が湧き
 起つて来る。おぼろくの春月が水に一帶に穏な光を投げてゐる。
 すべてが軟かに和みきつた晩である。あゝ、こんな晩に、すつぽん
 が時を作りさうだと、奇抜な、しかも自然な想像を廻らしたので
 ある」「実はこのすつぽんの時を作るといふ想像が、一茶のほし
 いまゝなる着想でなく、春の季題の『亀鳴く』といふから来たら
 しい。無論亀が鳴く筈もないが、昔からさう感得されたものか俳
 人は之を季題にしてゐるのだ。そこで同族のすつぽんを持つて来、
 そして時を作ると鶏のならばしを転用したのである」。勝峯『評
 釈』に、「春はあの幽邃な水を湛へる沼の中にもはひ寄つて、天
 心の月もおぼろに、寂光の暈をその上にひろげてゐる。この景、
 この時、鶏犬の声は聞える筈のない無人の境にあつて、確に鳴く
 とかいふあの亀が、或はひよつと時を知らせる『とき』をつくら

ぬでもあるまい。すつぽんの告げる『とき』、もしそれが聞えた
 らと、伝奇的な淡い期待で、ぢつと佇んで足しびれも忘れる一ト
 時である」。伊藤『小林一茶集』に、「春の月をめでて。すつぽん
 は勿論鶏の様に時を作るわけではないが、春の季題。『亀鳴く』よ
 りヒントを得た奇抜な著想」。川島『新解』に、「『亀鳴く』は気
 分的には味のある題である。この句の背後にもこの季題観念が潜
 んでいて、それが『すつぽんも』となつた訳であろうが、亀より
 も精悍なすつぽんを想像裡に捕らえて、『時や作らん』と、人の
 意表に出たところは、高度の俳諧化、感覚の非現実的飛躍とも言
 うべきであろうか。ややうるみを帯びている春月の下に、おっと
 りとしまつてゐる油のやうな水面、その余りの静けさに反撥し
 てみたくなるやうな気分の高揚が、調子はずれな表現の中に生か
 されている。この句が単なるおもしろがりや思いつきに墮さなかつ
 たことは、作者と自然との間に気分の醇化が行われていたため
 ある」。中島『小林一茶集』に、「のどかな水辺の春景色。鶏なら
 ぬすつぽんまでが、春の月をめでて、時を作るかと思われる」。
 加藤『秀句』に、「水を漫々と湛えた水辺は春色が深くなって、
 春の月が夢幻の境をつくりだすやうな夜、これに誘われてすつぽ
 んも鶏のように時をつくるのではなからうかというのである」
 「春月のあまねくさしわたる水辺に立っていると、ふと『亀鳴く』
 ということが胸に浮かんで、亀の類、すつぽんの鳴くことに思い
 及んだのであらうと思う」「もちろんすつぽんも鳴きはしないが、

る雀哉」「名代のわか水浴る雀哉」。

注 「とし男」、『日次記事』に「正月元日若水ヲ汲ム人、歳男ト謂フ。此ノ水ヲ煮テ福拂シト謂フ。」「僕」、下男。

解 (年男をつとめる下男などあろうはずのないわが家だが) 名代に鳥が水をかぶって身を清めているよ、の意、鳥の年男に俳諧性を見る。

▼ 黒沢『研究』に、「信州で年男と云ふのは節分の晩に豆を撒く男のみ云つてゐるやうに考へます。兎に角、一茶にはその下僕がなかつた、別に若水を汲む役目をつとめるものがなかつたが其の代りとして鴉が行滾ははろみか小川かで水を浴びてゐる即ち年男なら若水を汲むのだが鴉だから水を浴びるのだと戯れたものでありませう。名代にと冒頭にどつしり持ってきたのが彼一茶の句の特色の一つであります」「鴉が水に羽を浸してゐる景色は、冬の暖かい日など能く信濃高原に住む者の見るところであります」。勝峯の『評釈』に、「武家でなくとも、作男の一人も置ける百姓なら、豆打から若水汲みまで、縁起のよい年男の名で、すべてを勤めてくれるのだが、貧乏なこの屑屋では下男なんぞ使へる余裕はないし、ぢむむさいこの年では、そんなことで動くのは懶いし——や。かからずめが、見ろ、浴びてゐるぞ。あの井戸、あの水、あの雫。年男はからすの勘左衛門が、どうだ。年男の名代までやつてくれる訳だ。からすの年男は面白い。俳諧寺初春の絶景だ。野人一茶のこんな風の心境を詠んだのである」。伊藤『小林一茶集』に、「不精

な主人公の身代りに鳥に若水を使はせておく。鳥の行水の連想」。中島『小林一茶集』に、「年男は新年に門松を立て、若水を汲み、正月の儀式一切をとり行う役に定められた男。鳥が年男の身代りに若水を浴びて身を清めているというところ」。

水江春色みづのえ

すつぽんも時や作らん春の月 (一茶)

⊕ 『七番日記』文化15・3。『スツポンも時や作らん春の月』。文政2・2・15付李園宛書簡にも。

注 「水江春色」、水辺の春景色。水の江の浦島子から「すつぽん」(亀)を思い寄せる。

解 すつぽんも鶏が時を告げるように鳴き出すのではないか。この美しい春の月に会っては、の意。亀に発声の機能はないが、『夫木抄』の「河越の遠の田中の夕闇に何ぞときけば亀の鳴くなる」(為家)を典故として、「亀鳴く」は春の季語。水江—浦島子—亀(鳴く)—すつぽんという奇抜な着想。『江戸両吟集』に、「此梅に牛も初音と鳴つべし」(桃青)。

▼ 川島『新釈』に、「この句を無稽のものとして、一概に退けて了ふ人は、未だほんたうに気分といふもの、解せない人だと思ふ」。「この句は亀の同種族で、然も亀とは反対に慄悍なすつぽんを捉へて来て『時や作らん』と大きく出たところは、たしかに奇想で

二つになるのだから、這ってくれ、笑ってくれ、というのがこの句の意味で、子供に対する親心、ことに老齢にして初めて子供をもった一茶は、引きのばしてやりたいほどに、その成長をまだるこく思ったのだから、この句の気持は一そうよくうなずかれる。そこで、俳句というものが、一句の独立した俳句としての文学的のヴァリュエーというものと、随筆のごとき文章の中にあつての役割としての効果というものは、おうおう混同されるけれども、これは区別して考えられるべき問題をもっている。この『這へ笑へ』の句のごときは、これを一句として出したならば、ただ人間的の気持が率直に書かれているというだけであつて、『詩』としての要素は甚だ希薄ではないだろうか。してみると『俳句』としてははなはだ力の弱いもの、昔の人の評語をもつてすれば、『俗談平話』のものにすぎないといつてもよいようである。中島『小林一茶集』に、「さあ娘よ、この正月からはお前も二歳になるのだよ。このめでたい日に這ってごらん。笑ってごらん。そうして、私を喜ばせておくれ。老齢にして初めての子をもった一茶の親心が涙ぐましいまでに、率直に流露している。これは、もはや伝統的な季題趣味の発句とは別なるものであろう」。加藤『秀句』に、「まだいとけない子の前に、一人前の雑煮の膳を据えるのも、世の常の親心と同じことだと言っただけではすまないものがある。老いたる親のまだいたいけな子に対する感情が痛いくらいである。しかし、それに打たれることと、詩としてのこの作品の力とは厳

密に区別して見られなければならない」「一茶の場合は、素材になる庶民的な人情が共感を呼びやすいために、詩として見ないで、人情として見てしまうことになりやすい」。

考 『おらが春』には、明らかに起稿以前にその準備がなされていた章段と、起稿後にその題材を得た章段がある。明らかに準備がなされていた章段は、第一話の前段、第八話から十一話までの継子譚群、そして第十二話「さと女の記」である。

第十二話には、『類柑子』の「ひなひく鳥」の影響がはっきりと見え、そこからの引用句もある。したがって、語注で示した井上河州公の「はへばたてたてば歩めと思ふにぞ我身につもる老をわするる」との関連も看過できない。

前項に引いた荻原井泉水、中島斌雄、加藤楸邨の所見、特に楸邨の「素材になる庶民的な人情が共感を呼びやすいために、詩として見ないで、人情として見てしまうことになりやすい。」は一茶の句解釈上の警鐘といえよう。

とし男つとむべき僕しんぼくといふものもあらざれば

名代みやうだいにワカ水浴る鳥かな

一茶

㊦ 『おらが春』初出。

▽ 『八番日記』文政2・1、上五「名代の」。

▽ 『七番日記』文化15・11に、「菴」と前書きして「名代の寒水浴

這へ笑へ二ツになるぞけさからハ (一茶)

㊦ 『七番日記』^(文政元) 文化15・12。

▽ 『八番日記』 文政2・1に、「こそ^(五)十月生れた(る)娘に人並の雑煮祝はせて」と前書して、「這へ笑へ二ツに成るぞけさからは」。

注 「こそこの五月生れたる娘」は、前年(文政元。文化一五年四月改元)五月四日出生の長女・さと。「這へ笑へ」、「おらが春」第十二話(さと女の記)で、下敷きにする其角遺稿『類柑子』所収の「ひなひく鳥」に、「はへばたてたてば歩めと思ふにぞ我身につもる老をわするる」(井上河州公)。人情本『恩愛二葉草』に、「這へば立てと思ひ、立てば歩めと子を思ふ、親の心の遣る瀬なく」。

解 さあ、這い這いしなさい。さあ、笑いなさい。今朝からは二歳になるんだよ、の意。

▼ 川島『新釈』に、「去年の五月生れたる娘に一人前の雑煮膳を据ゑて」と前書があつて、文政二年正月の吟である。「それまでに生れた子供が何れも生れるそばから死んで了つたので、さと女に於て子供の育つて行くほんたうの楽しさ、ほんたうの可愛さを味つたやうである。然し、そのさと女も間もなく早世した」。黒沢隆信『一茶俳句研究』(大洋社、昭8)に、「よく信州あたりでは『箸揃へ』と云つて兎の将来を祝つてやる儀式があります、民

家では平素さうしたことをやる際がないので正月行ふ習慣になつてゐます。這へ笑へと頭首に置いて座五に今朝からはと倒叙法を用ひてゐるところは何でもないやうで一茶の老熟の手腕を知ると共に、又一茶のいかにその子を愛したか、如実に描き出されてゐるところと思ひます。言外に一茶自身が親として満悦の心持が溢れ出してゐることを知り得られるのです。勝峯『評釈』に、「可愛く育つて、あやせばにこ／＼よく笑ふ。笑つて／＼、さつさと這ふやうに早くなつてくれ。今までの寝つ兎が這つ兎になるんだ。それ、今朝からは二つになつたのだぞ。と、二本の指を動かし見せびらかしつゝ、這へ笑へと呼びかけ、悦び溢れて、無心の笑顔をあやしてゐるその額には老の波が寄り、髪は白く染まつてゐる。その一茶の父性愛が、箸で雑煮をちぎつて、あんと開く口へ哺めてやる主動的な家庭風景が、銀幕へ大写しにされるやうである」。

川島『新解』に、「あやせば笑い、人見知りやむずかることも覚え、ようやくえんこすることの出来るようになった子に、雑煮もちを小さくちぎつて口に運んでやりながら『ソレ食べろ、ソレ笑え、今朝から二つになつたのだぞ、早く大きくなれ、早く這い這いしな』と、無心の子に話しかける親心。這えば立て立てば歩めの親心を地でいく一茶の愛情のあせりが感ぜられる」。荻原『一茶名句』に、「一人前の雑煮膳をすえても、まだ餅など食べられはしない。しかし、もう這い這い位はできるころであるし、女の子のことだから、笑いはじめも早いであろう。この正月からは

た安堵感が感じられる。いかにも俗人らしい安心境であり、必ずしも高い悟達の心境を表すものとは言えないが、生涯を凡愚の煩苦にまみれて過ごした一茶にふさわしい感懐と言えよう」。栗山理一『小林一茶』筑摩書房、昭45)に、「今さら仰々しく祝いごとをしてみたところで、老先も短い身にはどうなることでもなし、めでたいといってもまあいい加減なもので、それでもよろしいではないか、ということになるう。ふてくされているのでもなく、かといって安心立命の清澄な心境でもなく、ありのままをすっぱりと投げ出して、このままが一番気楽なんだ、これで結構ではないかと、斜に構えた姿勢が詠まれている」。金子兜太『一茶句集』(岩波書店・古典を読む、昭58)に、「あんまり目出度がりもせず、と言ってほ、つ、た、ら、か、し、ということでもなく、阿弥陀さまにお任せしてほどの(「ちう位」の)正月を、ということだろう。高僧には高僧らしい新年の賀しかたがあるが、並の者には格別のこともできないからほどほどに、と受け取ってもよからう。この句を読むと、一茶のなんとない自足の心情を覚える」。

考 この句、『おらが春』第一話本文の結びの一句である。第二十一話とその結びの句、「ともかくもあなた任せのとしの暮」に呼応させて、第一話を改稿した、その時(文政三年正月以降)に成った。

『おらが春』第一話は、『沙石集』巻九「迎講ノ事」によった普甲寺上人の話を略述し、「物に狂ふさまながら、仏門においてハ、

いはひの骨張なるべけれ」と、条件をつけてひとたび肯定した上で、「それとはいさゝか替わりて、おのれらハ、俗塵に埋もれて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝尽しも、厄払ひの口上めきてそらぐしく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑屋ハ、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず、煤はかず、雪の山路の曲がり形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける」と、自身の迎春と対比して、この句で結んである。

『沙石集』には、「万事ヲ捨テ臨終正念ノ事ヲ思ヒ、聖衆来迎ノ儀ヲゾ願ケル」「臨終ノナラシニモセバヤト思事待リト被申ケレバ」などとある。一茶はこれを、「仏門においてハ、いはひの骨張なるべけれ」とした上で、「それとはいさゝか替りて」と、自身の親鸞教徒としての姿勢を述べたのである。

「臨終ノナラシニモセバヤ」は、まさに「雑行・雑修・自力の心」にはほかならない。したがって、「仏門においてハ」は、正確には「他宗にあつては」「彼の仏門においては」、の意。「おのれらハ」の「おのれら」は「おのれら門徒(親鸞教徒)」の意。また、親鸞教は正月に門松を立てない。このことは、秀円の『茶店問答』や篤胤の『出定笑話』などにも見える。したがって「門松立てず」は、親鸞教徒としての自身の生活姿勢の証であつて、その不精を言ったものではない。^(注1)

こぞの五月生れたる娘に、一人前の雑煮膳を居^すへて

せ』と言ふ口の下から猶この差別観を脱し得ないのが一茶の本音であらう。川島つゆ『おらが春新解』(明治書院、昭30)に、「この一章(注、おらが春第一話)は、普甲寺上人の話を前提として俗人の安心境を述べたもので、末段『それとはいさゝか替りて』からリアルな叙述になっている。殊に『屑家はくづ屋のあるべきやうに』から『曲り形りに』を直接受けて、めでたさも中位すなわち、世間並とはいかずとも、どうなりこうなり新年を迎えることが出来た、というのであるが、この『ちう位』は文字面以上で自足・自負をあらわしているものと見たい。屑屋は屑家なりよろしき。門松も立てず、煤掃きもせず、この気楽さはどうだいと言っているような、世間を尻目にかけて野人一茶の不敵な面だましいがのぞいている。その不敵さが、どっしりと座五『おらが春』に感じられる。栗山理一『蕪村・一茶』(古典文学鑑賞講座、昭32)に、「新年を迎えることになったが、今さら仰々しく祝いごとをしてみたところで、老先も短い身にはどうなることでもない。私の正月はめでたいといっても、まあいい加減なもので、それでもよろしいではないか、の意。『ちう位』は信州方言で、いい加減、あやふや、あいまいというほどの意味となる。方言では「チュックレー」と発音する。荻原井泉水『一茶名句』(教養文庫、昭34)に、「いわゆる『上を見れば方図もない』が、下を見ればその日の糧にも窮する者もある。中位のめでたさこそほんとうのめでたさではないかと、自分としてそのところを得た

ものとして落ちついた気持なのである」。中島斌雄『小林一茶集』(古典日本文学全集『与謝蕪村・小林一茶集』、昭35)に、「人の境涯は上を見れば限りもなく、下を見ればその日の糧にも窮する者もある。そこで、新玉のたちかえる春の初めにあたり、まずまず、無事息災で細々と暮らす中位のめでたさにあまんずるのが、自分としては相応であろうと観じたのである」。加藤楸邨『一茶秀句』(春秋社、昭39)に、「ここでは、結局自分を小さな存在だと自覚し、その小さな自分を大きな力に任せてしまおうという諦めが土台になっていることがわかる。これは、仏道の悟りというようにつきつめたものではなく、どうもがいてもどうにもならなかった小さな自分の力の限界を知って、そこでもかく小さいままの安心をつかんでゆこうとする気持なのである」。丸山一彦『小林一茶』(南雲堂櫻楓社、昭39)に、「句の『ちう位』はいわゆる中程度の意に解されているが、実はあやふや、いい加減、どっちつかずの意の方言で、浮世草子などにも用例が見える。句意は、世間並みに門松も立てず煤掃きもせず、何の用意もなしに迎えた正月であるが、いずれ先の見えている老の身に、今更鶴の龜のと祝ってみたところで、どうなるものでもなし、めでたさといつてもいい加減なもの、だがそれで結構じゃないかといったような、世間を尻目にかけて、一茶らしい面魂が覗いている。『おらが春』は、一茶の生涯で最も安定した、幸福な時期に綴られたもので、この句にも、長い間の生活の辛勞から脱し得たという、満ち足り

く人なしに秋の暮』に於いて、透徹した寂寞境を鋭い旋律に現して居るに反して、これは寧ろ穏やかに、懶げに、『人生はこんなものだ』と云つて居るやうな気がする。「この句には理想がない。答もない。理想もなく答もないのが一茶の生涯であつた」。

吉田絃二郎「名句選釈・小林一茶」(改造社『俳句講座』第五卷所収、昭7)に、「世を拗ねた、皮肉な俳人の観察である。と同時にはほ、笑ましいユウモアが漂ふてゐる。世に拗ねて見る。だが世を捨てることはできない。何処までも世とともに生きないではをれない。春はやはりめでたいと感ずる」。頼原退蔵『俳諧名作集』(講談社、昭10)に、『おらが春』は我が春、即ち自分のお正月といふ意で、信州の方言をそのまま用ひたのである。上々吉の目出度さでもない。まづ、中位の我が春だといふのである。荻原井泉水『一茶春秋』(育英書院、昭13)に、「此句はまさしく此生活感情から産まれた句である。即ち、此句の根基にあるものは彼の日常生活の物質的観念である。彼は此句を書く為に調書として書いたかのやうに、普甲寺といふ所の上人の話を持つし、又、『ことしの春もあなた任せになんむかへける』などと、宗教的の言葉を列べてゐるけれども、此話や此言葉と此句の感味との間に、内面的の連鎖は認められない。ただ、観念の似かよひから続けて読まれるやうに書かれてゐるだけである」「若し、一茶が果して凡てを自然の大きな力といふか、仏の慈悲といふか、或る絶対のものに帰依して、其与えらるるままを合掌して信受す

るといふ気持になりきつてゐるとしたならば、あるがままの世界が悉く目出度きかぎりの風景である訳で、その目出度さを上位だの中位だのといふ段階などを感じずべき筈ではない。『上』だの『中』だのといふ区別を立てる事が既に物事を物質的に価値づける思想である。『上』を上とし『中』を中として感じ分かつ事の心理にわたくし(私)の取捨といふものが首をもたげてゐる」。

暉峻康隆『蕪村一茶名句の鑑賞』(興文閣、昭14)に、「自分の不運な身の上を、過ぎ去つた去年を思ひ、来るべき今年の生活を思ふ新春に際して、客観的な気持で打ち眺めたのであります。この句の中には理想もなければ、悲痛な感情もありません。それは長い長い不幸な生活の末に辿りついた現実肯定の強い、しかし穏やかな心境であります」。勝峯晋風『評釈おらが春』(十字屋書店、昭16)に、「たゞ、一心に弥陀を信仰して、どうなさらうと、それは、なさるまゝにすつかりおまかせする。この安気な心持、これこそ五十七年の煩惱をさらりと忘れ、苦勞を棄てさせて頂いた弥陀のお蔭だ。それが目出度い、勿体ない仕合せだ。さう思へば有頂天になつて祝はれないまでも、その半分だけ、上中下の格付をするなら中位だ。下々の下の下根で、何んのかの拗ねたり、猜んだりした去年までの初春にくらべてこの目出度さが、この中位なところが、おらが春なのだ。お、おらが春だ。春だ」。伊藤正雄『小林一茶集』(日本古典全書、昭28)に、「上々吉の目出度たさとは言ひ得ないわが境界を拗ねた気持がある。『あなた任

『おらが春』所収句全注解(一)

黄 色 瑞 華

凡 例

- 本稿は、『おらが春』所収句(一茶三三、他三三)の全注解である。
- 一行目に、『おらが春』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に(一)に入れて注した。
- 二行め以下に㊦として、初出及び他書に所収の有無を注した。
- 句形等に『おらが春』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 語注は、簡略を旨とし、必要最小限にとどめ、特に必要な場合は「考」として別に記した。
- 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。
- 一 注釈史上、主要な注は▼以下に記した。ただし、その著者及び書名は、初出においてのみフルネームで記し、以下は「川島『新釈』」のように略記した。詳しくは、稿末の「参考文献」を参照されたい。

目出度^{めでた}さもちう位^{くみみなり}也おらが春 一茶

㊦ 『おらが春』初出。

注 「ちう位」(方言)は、①「ちゅっくらしい(くれえ)の大きさ」「ちゅっくらしいのでき」、②「ちゅっくらしいなやつ」などと使われ

る。「ちゅっくらしいな家」と言えば、本百姓(自作農)程度の家柄、すなわち、その村落で中位以上の家柄をさし、「ちゅっくらしいのでき」と言えば、一応満足すべきできばえ、の意になる。また、「ちゅっくらしいなやつ」と言うときは、その人物の誠意に欠けるさまを卑しめて言うことになる。したがって、②の意にとれば、めでたさと言っても「いい加減なもの」ということになり、それは作者の自嘲とみなければならぬ。だが、親鸞教徒として、それが一茶の勝手な解であっても、自身の信心について述べた第二十一話、その章段の結びの句に呼応させた第一話後段の内容から、自足の気持を否定することはむずかしい。

解 めでたさはとりたてて言うほどのものではないが、私にとっては分相応の新春というべきだ、の意。巻末の「ともかくも」の句に呼応させてある。文政三年正月以降の成立。

▼ 川島露石(つゆ)『一茶俳句新釈』(紅玉堂書店、大15)に、「一茶晩年の人生観と見るべきもので、彼の芭蕉が『この道や行